

【教育実践報告】 生徒が主役の授業を旨として

地域教材「四面石塔」を活かした授業づくりから 30 年

NPO 法人安房文化遺産フォーラム 代表 愛沢 伸雄

高校世界史教諭であった私は、1990年代から足もとの地域にある戦争遺跡や「噫従軍慰安婦」碑などを教材化し授業をおこなってきました。「四面石塔」については世界史だけでなく、高校1年生1学期の「現代社会」において19時間授業を実践しました。テーマは「現代社会における人間と文化～文化交流と国際理解」としました。

学習のねらいは、第1に図書室での「調べ学習」を中心に、生徒自らが学習課題を主体的に探し出し、それを探求するなかで様々な認識を変容させていくこと。第2には、地域の歴史資源を学ぶことを通して、国際的な地域認識を育てることにありました。

奇しくも日韓国民交流年の2002年には、日韓共催のサッカーワールドカップという一大イベントがありました。これを視野に入れ、今でいうアクティブラーニングの授業づくりであったと思います。すでに四半世紀を経た教育事例ですが、当時の生徒が書いた小論文や授業後の感想を読んでも、まったく色褪せた感はありません。「四面石塔」400年という節目の記念碑として、あらためて紹介します。

<授業展開の構成>

- ▷ 1時間目：真の国際化とは何かを考える
～ 2002年ワールドカップと日韓国民交流年
- ▷ 2時間目：「四面石塔」をこう推定する
～ レポート作業・提出
- ▷ 3時間目：「四面石塔」をこう見た～意見交換
- ▷ 4-5時間目：図書室調べ学習～テーマ設定
- ▷ 6時間目：建立の時代や仏教の年表を作る
- ▷ 7時間目：テーマ設定の予備調査
- ▷ 8-9時間目：図書室調べ学習～テーマ設定
- ▷ 10時間目：愛沢作VTR視聴「四面石塔」の謎
- ▷ 11-14時間目：図書室調べ学習～雄誉上人
- ▷ 15時間目：調査研究ファイル作成
- ▷ 16-18時間目：小論文作成（2,400字）
- ▷ 19時間目：小論文と調査研究ファイル提出
(期末考査)

<千葉県立長狭高校1年生S.Aの小論文>

「なぜ四面に違う文字なのか」

1. はじめに

私は千葉県館山市の浄土宗大巖院にある千葉県指定有形文化財「四面石塔」を知り、いろいろな疑問が浮かんできた。そのなかで、私はそれぞれの面の文字の国と日本との関係や交流を知りたいと思い調べた。まず、それぞれの文字について知り、日本と関係の深い国について知ろうと思った。次に石塔に刻まれている「南無阿弥陀仏」についてどういう意味で、なぜその文字なのかということを探ることにした。

2. 文字について

まず、それぞれの文字について知ることによって、日本との間に何かあるのかということを探った。北面の文字については「悉曇(しったん)」という。悉曇とはサンスクリット語の Siddham の音訳であり、サンスクリットの文字を悉曇と称している。一般的にはサンスクリット文字、専門的には悉曇として使い分けられている。悉曇学というのは、中国と日本においてサンスクリット文字においてなされた文字や音声の学問という。日本語とサンスクリットの間には、古来中国を通じて、非常に深い関係がある「南無阿弥陀仏」といった題目も本来はサンスクリットに由来している。

次に西面の文字については、漢字になる前の文字で「篆字」という。日本で使われる漢字は中国から由来してきたものである。南面の文字も日本で使われている漢字である。

そして東面の文字は朝鮮の文字で「ハングル」という。このハングルは李氏朝鮮の第4代国王世宗が1446年に公布した「訓民正音」という文字で書か

北面	西面	南面	東面
悉曇 시담	南無阿彌陀佛 남무아미타불	南無阿彌陀佛 남무아미타불	南無阿彌陀佛 남무아미타불

「四面石塔附石製水向」
(千葉県有形指定文化財)



れている。それは現在使用されているハングルの基となった古い文字で、短期間で消滅したため朝鮮でも近年までよくわからなかったものという。このようにそれぞれの文字から中国や朝鮮と日本が何か関係があったということがわかった。

3. 「南無阿弥陀仏」について

四面に刻まれている文字を解読したところ、どれも「南無阿弥陀仏」という文字ということがわかった。それはお寺などで多く耳にする言葉であったので、もっとよく知ろうと調べた。「南無阿弥陀仏」という文字は「阿弥陀仏」に帰依するという意味で、中国唐代の高僧善導の解釈によれば、「南無」とは帰依を意味するサンスクリット語であり、仏に帰依して救いを求めようとする民衆の願いを実現するために働く阿弥陀仏の行動を示しているという。「南無阿弥陀仏」によって、民衆の願いと仏の行動が一つになって、平和な極楽浄土で仏になることができると説いた。つまり、生命の危機や死の際に「南無阿弥陀仏」と唱えれば皆が仏になり、極楽浄土で幸せになるという。

こういうことから日本や朝鮮などが阿弥陀仏の力で皆が友好で幸せになることを願い、「南無阿弥陀仏」と刻んだのではないかと、私は推定した。

4. 日本と朝鮮との交流-「朝鮮通信使」をみる

調べたなかで日本と朝鮮とはいろいろな交流があったとわかったが、さらに調べていくと、豊臣秀吉の「朝鮮侵略」が大きな意味をもっていることがわかった。1592年から96年の秀吉の「朝鮮侵略」は朝鮮の人々の心に日本人に対する憎しみを残した。しかし、江戸時代に入ると対馬藩や幕府の対応のなかで友好関係は回復する。これは朝鮮通信使の来日というかたちで実現したのであった。

この朝鮮通信使というのは、朝鮮国王が日本国王(将軍)に国書を渡すために派遣した使節である。はじまりは1404年に足利義満が朝鮮と対等な外交関係を結び、双方で国書を交換したときである。しかし、両国使節の友好的な往来は、1592年からの朝鮮侵略(文禄の役)と1597年の朝鮮再侵略(慶長の役)という一方的な侵略戦争で崩れてしまった。

江戸幕府は、こうした侵略戦争の後に友好関係を修復していくために、江戸時代を通じて朝鮮通信使を招くようになった。通信使は1607年から1624年までの国交回復・戦後処理のための使節が3回と、1636年から1811年までの将軍代替わりのときの使節が9回の合計12回である。最初の3回は日本からの使節に対する答礼の使節で、回答兼刷還使という。これは答礼を兼ねて、秀吉の「朝鮮侵略」のときに日本へ連行された多くの朝鮮人捕虜の返送を目的にしていた。捕虜には陶工や学者などが含まれていたが、彼らが江戸時代初期の技術・学問の発展に果たした役割は大変大きなものであった。この答礼

のための使節が派遣される背景には、長年朝鮮と日本間で交易を通じて文化交流を続けていた対馬藩の役割が重要であった。

また、記録によると通信使が途中で立ち寄りたところでは、日本の知識人の訪問があつたという。当時の日本において儒学の先進国である朝鮮から学びたいという意識が高かったのだろう。このことから通信使を通じて江戸時代には朝鮮の文化が伝えられ、友好的な関係があったことを忘れてはならない。

5. おわりに

この石塔について調べていくうちに、たくさんの疑問が浮かんできて、何かワクワクしたような気持ちになった。今までこういうまったくわからない、資料も少ないものについて、こんなに詳しく調べたことがなかったのでかなり手こずった。

私のテーマであるこの石塔に刻まれている4つの文字は、それぞれサンスクリット(悉曇)・篆字・漢字・ハングルであることがわかったが、このなかでもハングルの文字が日本との関係が一番強いと感じ、とくにハングルや朝鮮との交流について調べてみた。その結果、16世紀末の秀吉の「朝鮮侵略」が関係しているように思えた。しかし、そのことが関係あるかどうかについては、資料もなくよくわからなかったが、調べたなかでは重要な関わりがある出来事と思った。そして、「南無阿弥陀仏」という文字は、仏に帰依して救いを求めようとする民衆の願いと仏の行動が一つになって、平和な極楽浄土で仏になることである。それが「南無阿弥陀仏」を唱えることの意味とわかった。この言葉がもし秀吉の「朝鮮侵略」と関係すれば、石塔は日本と朝鮮との友好と平和の思いを表したものかもしれないとまとめたい。四面石塔を通じて日本と朝鮮の出来事を学んできたが、テーマを決めて調べるなかで、とくに両国には友好と交流の深いつながりがあったことを知った。

<授業後の生徒たちの感想>

- ・テーマ設定も資料探したいへんだったが、だんだんワクワクする感じになった。
- ・分からないことに疑問を抱き、調べるうちに色々なことを得るといえるのは、素晴らしい「学び方」だと思った。このような学習は必要。
- ・朝鮮との深い結びつきを知り、日韓の友好や交流の関係が分かった。
- ・四面石塔は、これからの日本と韓国関係をもっと良くするためのきっかけの一つになる。多くの人に知ってほしい。
- ・地域のことを何も知らないと思い知った。安房には立派な歴史があることを学んだ。